

## 研究主題

# 生きて働く力を育む国語教室 ～言葉による見方・考え方を働かせ、深まる学び～

### 1. 研究主題に込めた願い

#### (1) 目指す生徒の姿

「言葉による見方・考え方」を働かせることで学びが深まることを実感し、学んだ力を生かして未知の状況にも対応し、人生や生活を豊かにしようと学び続ける生徒。

現在、私たちの日常にはどんどん人工知能（AI）が普及し、生成 AI も台頭してきた。また、突然訪れた新型コロナウイルス感染拡大など、先行き不透明な予測困難な時代が到来している。このように急激に変化する時代を生き抜くためには、様々な知識や情報を活用しながら、自分の考えを形成したり、新しいアイデアを創造したりする力をもった人材が求められている。アインシュタインは「学校で学んだことを一切忘れてしまった時に、なお残っているもの、それこそが教育だ」と述べたと言う。学びへの向きあい方や構えが生徒たちの中に残り、授業での学びが授業の中だけでとどまるのではなく、日常生活をはじめとする人生や社会、さらには未知の状況にも対応できる「生きて働く力」をこそ育てていきたい。

#### (2) 「生きて働く力」について

香川県では「生きて働く言葉の力」の育成を目指し、平成 21 年度からこれまで研究を続けてきた。「生きて働く言葉の力」を育むためのねらいやつけさせたい言葉の力を明確にしたうえで、生徒が主体的に学習に取り組めるように指導内容や方法を工夫してきたため、指導法の工夫には一定の成果が得られた。しかし、一方で、本当に子どもたちにとって、先に述べたような「生きて働く」力となっているのか、授業の中だけにとどまったものになっていないか、そもそも「生きて働く力」とは何か、という課題も見えてきた。そこで、具体的にどのような状態であれば、私たちが目指す「生きて働く力」が育ったと言えるのか、原点に立ち戻り研究を行うこととした。

そこで、まず、私たちは資質・能力の三つの柱を説明する言葉に着目した。三つの柱では「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性」という言葉に注目が集まるが、私たちは、むしろ、「実際の社会や生活で生きて働く（知識・技能）」「未知の状況にも対応できる（思考力・判断力・表現力等）」「学んだことを人生や



【文部科学省 資質・能力の三つの柱】

社会に生かそうとする（学びに向かう力、人間性）」という言葉に着目した。今大会では、「生きて働く力」を育むために、国語教室で習得した力を、どう人生や社会の中で活用できるようになるのかということに焦点をあて、そのことを生徒たち自身が実感できる授業を目指していきたいと考えた。

(3) 「言葉による見方・考え方」について

生徒が学習時だけでなく生活全体の中で、自分の思いや考えを深めるために、言葉と言葉、言葉と対象の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること。

学習指導要領解説には、「言葉による見方・考え方を働かせるとは、生徒が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであると考えられる。」と記載されている。

しかし、生徒たちにとっても教員にとっても『言葉による見方・考え方』を働かせる』『言葉による見方・考え方』を鍛える」ということはイメージしづらい。国語科には「教科内容がない」という指摘は古くからされてきた。授業で「確かなもの」「新しいこと」として何を学んだか、どんな力がついたかが曖昧で、上達観、達成感に欠け、生徒たちの探究心や好奇心を刺激するような学習が行われてこなかったからである。他教科のように、普遍的、客観的な「知識・技能」として何を学ぶか、本当に学ぶべき価値のある「知識・技能」とは何か、どんな思考を働かせるべきかといったことを明確にした学習活動が展開される必要がある。

そこで、本研究では、「言葉による見方・考え方」を便宜上、次のように捉え直した。

「見方」については、「どのような視点で物事を捉えるか」、「考え方」については、「着目した視点でどのように思考していくか」を表すものと解し、「言葉による見方」を「人物設定・語り手・象徴・根拠・中心・付加・色彩」など言語事項に係る視点とし、「考え方」を、「比べる・つなげる・変える」などの汎用性のある思考の様式であると定義した。

これらの組み合わせを「言葉による見方・考え方」とするとイメージし（表1）、授業を構想した。

**【表1 発展的な学習の指導】**

見方 考え方	人物設定	語り手	象徴	根拠	中心・付加
比べる					
つなげる					
変える					

## 2. 目指す生徒の姿に迫るために

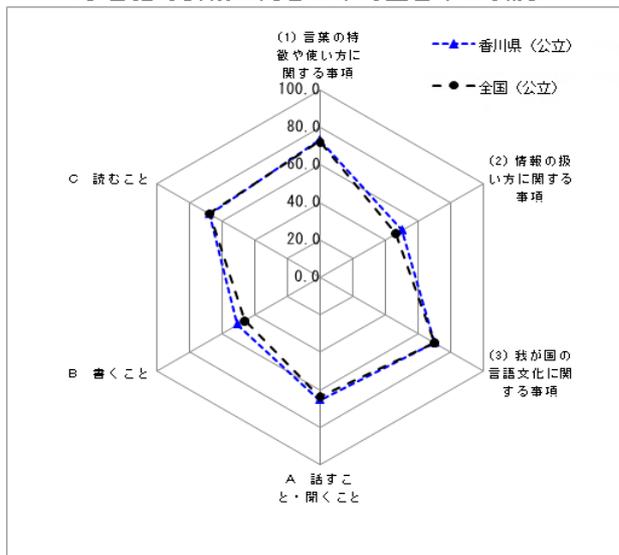
(1) 香川県の生徒の実態から(全国学力学習状況調査の結果から)

香川県の生徒の全国学力学習状況調査の正答率は、全国とどの項目においても大きな差はない【グラフ1】。しかし、質問紙に注目してみると、令和元年度の調査であった「国語の授業で活用したことを、普段の生活の中で、話したり聞いたり書いたり読んだりするときには活用しようとしていますか」の項目について、肯定的な回答は、全国が71.6%、香川県が68.3%と、全国よりも3.3pt低い結果となった。「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いませんか」の項目についての肯定的な回答も、全国に比べ令和元年度、令和3年度、令和4年度全て全国平均よりも低い結果となっている【グラフ2】。

学校質問紙からは、教員の指導も課題が明らかになった。全ての教科対象の質問ではあるが、「調査対象学年の児童(生徒)に対して、前年度までに、習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫をしましたか」の質問に対しては、令和3年度は11.1ポイント、令和4年度は7.6ポイント全国を大きく下回っている。これは、国語科も例外ではない。国語科の指導方法の質問では、補充的な学習の指導に関しては全国平均との差が少なかったり、上回ったりすることもあるが、発展的な学習の指導については、令和元年度は全国平均を14.3ポイントも下回る結果であった【表2】。「生きて働く力」を育てるためにも、習得・活用及び探究の学習過程まで見通した発展的な学習を行う必要があるという課題が明らかになった。

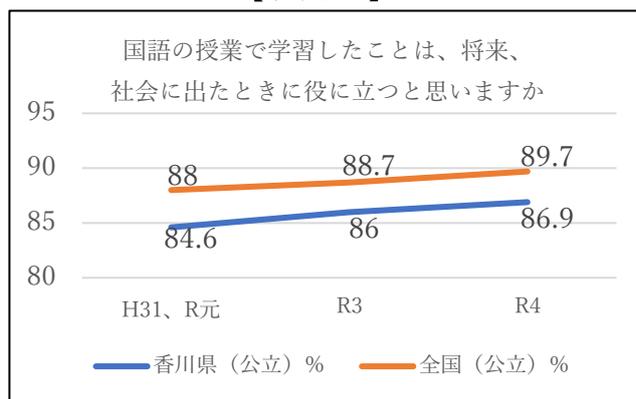
【グラフ1 香川県教育センター  
令和4年度 全国学力学習状況調査 国語】

＜学習指導要領の内容の平均正答率の状況＞



学校質問紙からは、教員の指導も課題が明らかになった。全ての教科対象の質問ではあるが、「調査対象学年の児童(生徒)に対して、前年度までに、習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫をしましたか」の質問に対しては、令和3年度は11.1ポイント、令和4年度は7.6ポイント全国を大きく下回っている。これは、国語科も例外ではない。国語科の指導方法の質問では、補充的な学習の指導に関しては全国平均との差が少なかったり、上回ったりすることもあるが、発展的な学習の指導については、令和元年度は全国平均を14.3ポイントも下回る結果であった【表2】。「生きて働く力」を育てるためにも、習得・活用及び探究の学習過程まで見通した発展的な学習を行う必要があるという課題が明らかになった。

【グラフ2】



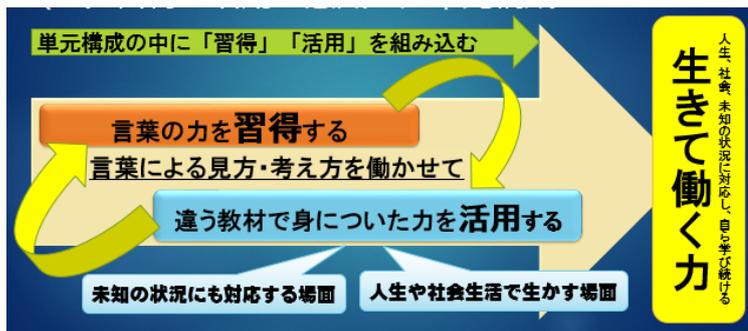
【表2 発展的な学習の指導】

	H31、R元	R2	R3
香川県(公立) %	60.3	実施なし	66.6
全国(公立) %	74.6	実施なし	72.9
県と全国の差(pt)	▲14.3	実施なし	▲6.3

以上、生徒の実態、教員の指導の実態の両面から、「生きて働く力」を育むために重要な、学校の教育活動のその先を見据えた発展的な指導が必要であると分かった。生徒が、授業の中で言葉による見方・考え方を働かせることで習得した力を、実生活の中で生きて働かせていくということがどういうことなのかを活用を通して実感し、自ら言葉による見方・考え方を働かせていこうとする姿を目指していく必要があると考え、研究を進めた。

## (2) 習得・活用を意識した単元構成

国語科の授業の中で、「生きて働く力」を育むために、単元構成の中に、「言葉の力に気付く習得の場面」と「習得した力を別の教材で活用する場面」を意図的に組み込むことで、言葉による見方・考え方を鍛え、自分の習得した力を人生や社会生活の中で生かす可能性を生徒たち自身が感じられるのではないかと考えた。これまでも、「習得」「活用」の授業は行われてきたが、



### 【今大会で目指す「生きて働く力」】

「習得」後の「活用」に限られている、「活用」が生徒にとって本当の意味での「活用」には至っていないなどの課題があった。「活用」する中で新たな力を「習得」することも可能であるため、「習得」と「活用」の往還を意識し、単元構成に「活用」を意図的に組み込む。「活用」では、人生や社会生活で生かす場面や、未知の状況にも対応できるような力を発揮する場面などを想定した教材の選定を行い、子どもたちが具体的に資質・能力をどう人生や社会生活の中で生かしていくのかを実感できる場面を取り入れていく。

## (3) 習得した力を自覚できるための、視覚化や可視化

習得した力を活用していく中では、授業の中で、自らの学びをいかに自覚させるのかというのがポイントとなると考える。習得した力がどんな力で、どのような時に役立つかまでを理解していなければ、活用することは難しい。習得した力を視覚化したり考えを可視化したりするなどの意図的な工夫を行うことで、学んだ力の自覚を高め活用へとつなげていく。

## (4) 生徒の「学びの場」の具体化

いくら「生徒たちにつけたい力」が自覚できる「習得」「活用」を見据えた単元構成であっても、生徒たちに魅力的だとは限らない。何より、まず生徒たちが、「知りたい」「やってみたい」「学びたい」と思うかどうか、さらにやってみて「学びがある」「さらに学びたい」と思うかどうか、こそが問われる。目の前の生徒一人一

人の学びを見取り、学びを刺激したり促進したりできるような「学びの場」を具体化していく。

### 3. 今大会の公開授業について

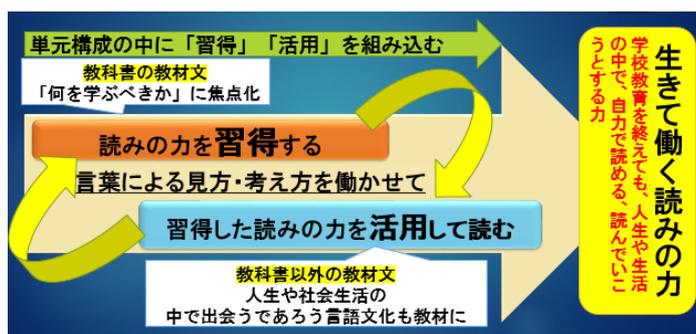
#### (1) 「読むこと」に限定した公開授業への思い

「学習指導要領」では、国語科において育成を目指す資質・能力を「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」としている。「学習指導要領解説国語編」には、「正確に理解する資質・能力と、適切に表現する資質・能力とは、連続的かつ同時に機能するものであるが、表現する内容となる自分の考えなどを形成するためには国語で表現された様々な事物、経験、思い、考え等を理解することが必要であることから、今回の改訂では、「正確に理解」、「適切に表現」という順に示している。」と書かれている。

「正確に理解する」ことなくしては、国語の力は育たない。そうすると、重要になってくるのが「読む力」である。国語科の目指す資質・能力を育成するために、今大会の公開授業にあたっては「読むこと」に焦点を置いた研究を行うこととした。

#### (2) 「読むこと」における「生きて働く」とは

「読むこと」の領域において、「生きて働く」とは、「学校教育を終えても、人生や生活の中で、自力で読める力、読んでいこうとする力」であると考えた。授業の中で、「何を学ぶべきか（読みの力）」に焦点をあて、言葉による見方・考え方を働かせて読むことの言語活動を行う中で、読みの力に気づき、そこで習得した力を、



#### 【「読むこと」における「生きて働く力」】

を、違う教材で「どう使うか」を考え活用する。活用できたとき、自分の中に育った読みの力を実感し、実生活やこれからの人生の中でも読む場面において、習得した読みの力を活用して正しく理解しよう、読み味わおうという意欲が生まれ、「学びに向かう力・人間性」が育まれると考える。そうすると「生きて働く力」と言えるのではないだろうか。

#### (3) 「言葉による見方・考え方」を働かせるための工夫

##### ① 人生や社会での活用を意識した教材の使用

授業の中での学びが、生徒の日常から離れた「学校知」としての「学びのための学び」に陥っていないかは、常に問われるところである。教室における生徒の学びとしての「学校知」が「生活知」と結びついた、日常での言葉の学びに直結する授業が求められる。

例えば、生徒にとって最も触れる機会が多い言葉は、J-pop等の音楽、アニメーションや映画などの映像作品といったサブカルチャーではないだろうか。そこで、



【授業実践例 2 「映像で読む、情景描写」 実施学年1年：習得→活用】

「飛べかもめ」「さんちき」で学習した「情景」や「題名」などの言語事項を踏まえた上で、短編映画の「透明人間」を読み解いていく。映画の場面ごとに背景の描写が人物の心情を表していないか、後の場面に展開が関わるかどうか、タイトルにはどのような効果があるかなど、学習したことを活用しながら作品を見る。

〈学習指導過程〉全8時間

(1) 『飛べかもめ』(習得)

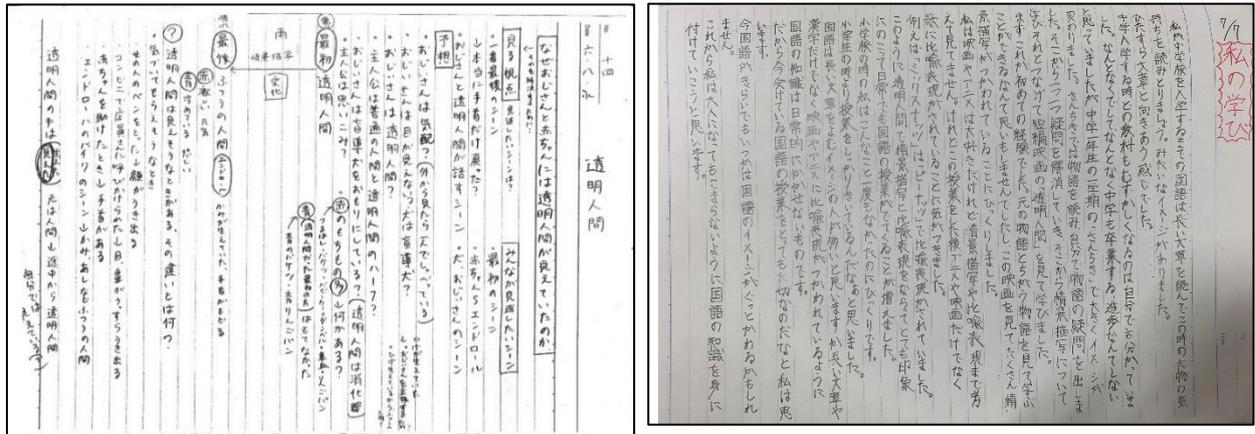
少年の気持ちが一番変化したのはどこかを考え「情景描写」について考える。(2時間)

(2) 『さんちき』(習得)

- ①疑問に思う点を出し合い全員で解消する。(1時間)
- ②侍の場面が必要か考え、「場面の効果」について考える。(1時間)
- ③題名に着目し「題名の効果」について考える。(1時間)

(3) 『透明人間<sup>2)</sup>』(活用)

- ①疑問を出し合い、学習課題を決定する。(1時間)
- ②映画を何回も見返しながら場面の効果や作品の表現の工夫などについて語り合い意見文を書く。(2時間)



【「透明人間」の授業ノート】

【振り返り】

②「言葉による見方・考え方」の可視化を目指したカードシートの活用

「言葉による見方・考え方」を鍛えるためには、どのような見方・考え方を働かせて読んでいるのかを、自覚していくことが必要であると考えた。意識するよって、読む力の習得を実感して、それをさらに活用していこうという意欲につなげる。そのために、言葉による見方・考え方を可視化することが必要だと考え、「言葉による見方・考え方カード【図3】」や「言葉による見方・考え方シート【図4】」を教材として開発することを試みた。その際、考え方カードの思考の種類を、香

<sup>2)</sup> ポノック短編劇場「ちいさな英雄一カニとタマゴと透明人間一」より

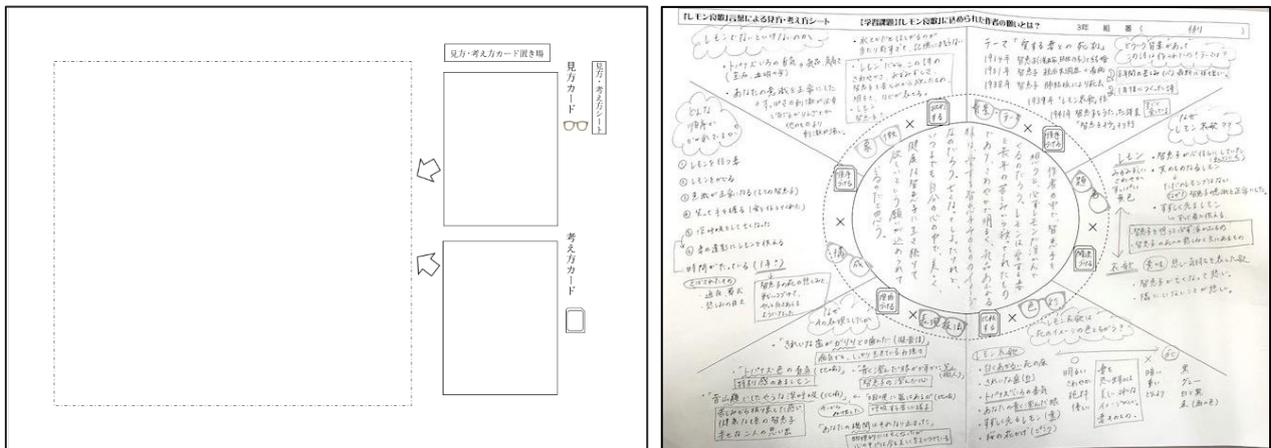
川大学教育学部附属高松小学校の「思考の『操作力の系統』」を参考<sup>3</sup>に「比べる」「つなげる」「かえる」の3種類に大別した。学習指導要領において求められる思考の種類は、19種類ある<sup>4</sup>と言われているが、多すぎると生徒の抵抗が大きいと考えた。

【19の思考の種類と分類】

「比べる」 ……分類する・評価する・変化をとらえる・比較する・焦点化する  
 「つなげる」 ……理由づける・見通す・広げてみる・順序立てる・関係づける・構造化する・関連づける・推論する  
 「かえる」 ……多面的に見る・具体化する・変換する・応用する・抽象化する・要約する



【図3 言葉による見方・考え方カードの例(それぞれを組み合わせる使用する)】



【図4 言葉による見方・考え方シートの例】

【授業実践例 3 「初恋とレモン哀歌」実施学年3年：習得→活用】

教科書に掲載されている二つの詩について、見方・考え方を可視化し、「どういった見方・考え方を学ぶのか」を意識したうえで「初恋」の学習を行い、「象徴」「色彩」等の習得を試みる。習得した読みの力について、「レモン哀歌」でどのように活

<sup>3</sup> 山本茂喜編著『ビジュアル・ツールで国語の授業づくり』東洋館出版社、2015

<sup>4</sup> 教科共通の思考スキルとその定義(泰山 裕ほか 2014)

用できるか考えながら読むことで、定着を図る。

〈学習指導過程〉全5時間

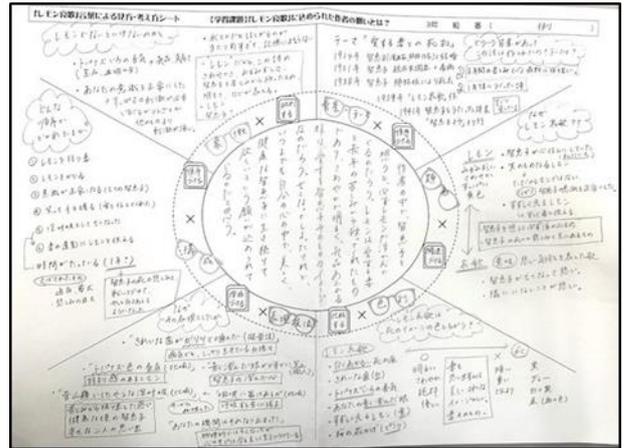
(1) 『初恋』(習得)

- ① 「象徴」「色彩」等の見方で比較をすることを通して「林檎」であることの意味を考える。(1時間)
- ② 「表現技法」に着目して、それを用いた作者の意図を考える

(2) 『レモン哀歌』(習得→活用)

- ① 言葉による見方・考え方を意識し、詩に込められた作者の願いを考える。(習得：1時間)

- ② 「レモン哀歌」のそれぞれの読みを班内で共有することで、多面的に作者の願いを考える。(活用：2時間)



【授業で用いたワークシート】

【授業実践例 4 少年の日の思い出

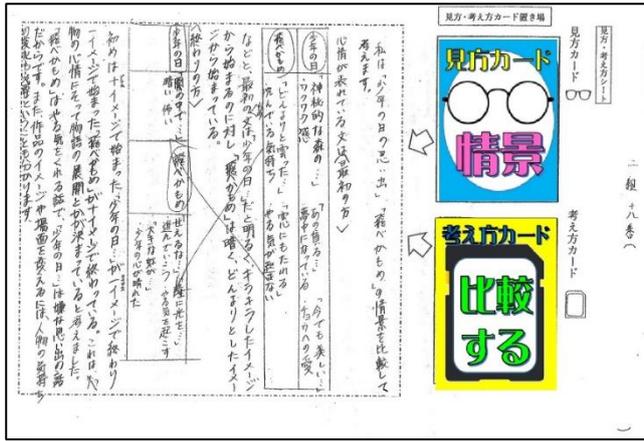
実施学年1年：習得⇔活用】

「少年の日の思い出」は、「私」が語る現在から「客」が回想を語る過去に戻る額縁構造となっている。こうした「語り手」の変更や、最後に現在に戻らない未完成な額縁構造という「構成」の工夫について学ぶ。また、文章全体の読解に際して、既習の「飛べかもめ」や「さんちき」で習得した「情景」、「伏線」、「人物像」などの既習事項を活用しながら、文章を読み進めていく。

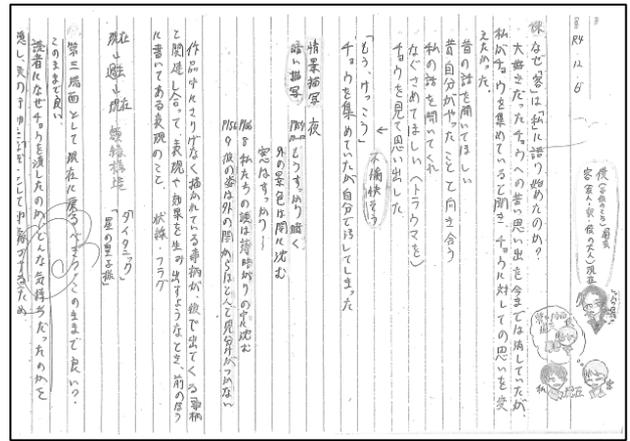
〈学習指導過程〉全7時間

(1) 少年の日の思い出

- ① 本文を通読した後、初読の感想や疑問点についてまとめる。(習得：1時間)
- ② 第2場面前半から、「僕」のチョウへの思いを捉える。(活用：1時間)
- ③ 第2場面後半から、二人の人物像を深める。(活用：2時間)
- ④ 僕がチョウをつぶした意味を考える。(活用：1時間)
- ⑤ 第1場面を読み、「客」と「私」の関係や「客」の思いを考える(習得・活用：1時間)
- ⑥ 第3場面があったとして、現在に戻る方が良いか、このままが良いか考える(習得：1時間)



【授業で用いた見方・考え方シート】



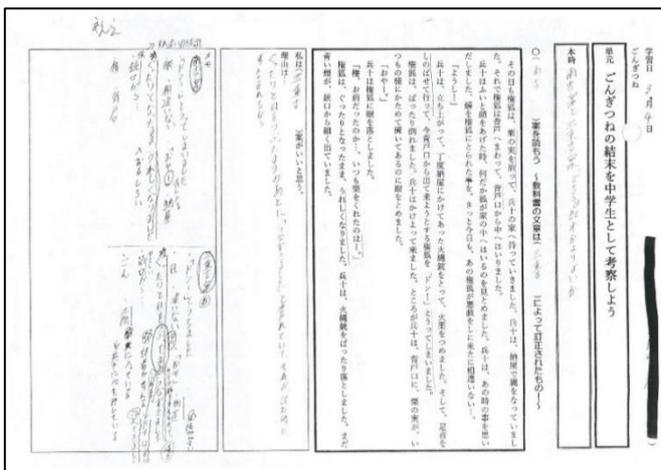
【生徒の授業ノート】

【授業実践例 5 「視点・語り手に着目しよう一つの物語を見つけよう」

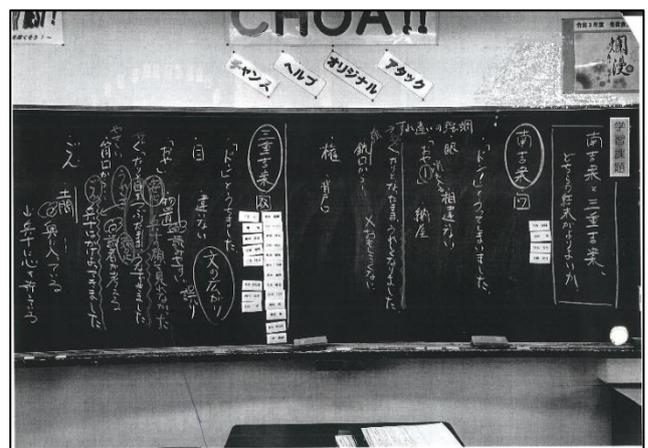
実施学年 1年：習得⇔活用】

「少年の日の思い出」で習得した「視点・語り手」を活用し、小学校で学習した「ごんぎつね」を読み解いていく。「ごんぎつね」は誰の視点で語られているのかを考えることで、結末部分のとらえ方が変容していく。そうすることで、小学生で学習した時よりもさらに深まりのある読みをすることができる。

- ② 「少年の日の思い出」から「視点・語り手」の見方を習得する。 (4時間)
- ③ 「ごんぎつね」を通読し、感想や疑問を共有する。 (1時間)
- ④ 2つの批評文を比較しながら、結末部分がごんと兵十にとって納得いくか考える。 (2時間)
- ④冒頭文の意味に着目し、「視点・語り手」を意識しながら結末部分を考える。 (1時間)
- ⑤草稿と定稿を比較しながら、どちらの結末がよりよいか考える。 (1時間)



【生徒の授業プリント】



【板書の様子】



令和2年度

- ① R2.6.25 「文学的な文章Ⅰ 三読法と芦田恵之助『冬景色』の授業」
- ② R2.7.30 「文学的な文章Ⅱ 分析批評」
- ③ R2.8.27 「文学的な文章Ⅲ 読者論」
- ④ R2.9.17 「文学的な文章Ⅳ 新教材『辞書に描かれたもの』の教材研究」
- ⑤ R2.10.15 「説明的な文章Ⅰ 『スズメは本当に減っているか』模擬授業」
- ⑥ R2.11.12 「説明的な文章Ⅱ 新教材『私のタンポポ研究』教材研究」
- ⑦ R2.12.10 「単元学習と大村はま」
- ⑧ R3.1.21 「文学における『語り』」（「少年の日の思い出」）
- ⑨ R3.3.4 「文学的な文章Ⅴ 発問（模擬授業）」（「私と小鳥と鈴と」「初恋」）

令和3年度

- ⑩ R3.5.20 「研究の方向性と『境界線上の教材』について」
- ⑪ R3.6.10 「授業研究（附坂中 田村先生『走れメロス』（VTR）」
- ⑫ R3.7.15 「授業研究（詫間中 畑先生『絶滅の意味』（VTR）」
- ⑬ R3.7.28 「教材研究（文学的文章、説明的文章、境界線上の授業）」
- ⑭ R3.9.16 「深い読みを行うための対話の効果的な組織化」
- ⑮ R3.10.14 「授業研究（豊浜中 岡田先生『わたしのタンポポ研究』（VTR）」
- ⑯ R3.11.17 「授業研究（仁尾中 大塚先生『Lemon 哀歌（米津玄師「Lemon」高村光太郎「レモン 哀歌」）』（VTR）」
- ⑰ R3.12.9 「授業研究（中部中 西山先生『走れメロス』（研究授業）」
- ⑱ R3.12.28 「『読むこと』の授業実践交流、全国大会へ向けて」
- ⑲ R4.2.4 「小学校教材『ごんぎつね』 中学校での発問」
- ⑳ R4.3.17 「授業研究（観音寺中 山崎先生『ごんぎつね』（VTR）」

令和4年度

- ㉑ R 「研究の方針確認、研究グループ編成、指導案作成予定確認」
- ㉒ R 「全国大会（鹿児島大会）分科会発表検討、指導案検討」
- ㉓ R 「全国大会（鹿児島大会）報告会、授業討議（高瀬中 白川先生『りんご』（VTR）」
- ㉔ R 「全国大会プレ授業の指導案検討」
- ㉕ R 「活用教材『透明人間』の授業検討」

【表3 三観支部自主研修内容】

5. 研究の成果と課題

研究を重ねる中で様々な「言葉による見方・考え方」を働かせる実践を行ってきたが、可視化をすることによって生徒が「今自分がどんな見方・考え方を働かせて考えているのか」、「この時間を通してどんな見方・考え方が身についたのか」等を意識して学習することができるようになった。また、音楽や映像作品といった、生徒たちにより身近であるサブカルチャーを、「学びの場」の具体化として積極的に取り入れることで、国語の授業で習得した「言葉による見方・考え方」を日常の生活

や他の学習につなげて活用しようとする姿が見えた【表4】。

そして、教師の視点から、教材研究の際に、「この教材がどんな見方・考え方を習得させるのに効果的か」、「どういった見方・考え方を活用しながら読めば読みが深まるか」と考えることができ、単元の中で何を学び身につけさせるかが焦点化され、授業づくりに大いに役立ったという成果も見られた。

しかし、同時に課題も浮かび上がってきた。これまでは1単元の中では1教材ということが多かった。それを、何を学ぶかを焦点化し、1単元の中で活用を含め2教材以上をこれまでと同じ時間数で行うことで、多読を可能にし、読みの力を鍛えていくことを理想としているが、単元によっては、1つの教材に時間がかかってしまい、1単元の時間数が多くなってしまうことも起こった。教材研究を進めれば進めるほど、学ばせたいことが増えてしまうことも一つの原因だと考えられるので、その中で特に何をおさえる単元とするのか、思い切って焦点化することが必要である。

また、今回は「読むこと」にしぼった授業として研究を進めたため、習得・活用が「読むこと」のみになったが、「読むこと」で習得したことを「書くこと」「話すこと・聞くこと」などにも活用していけるようにさらなる研究を進めていきたい。

【表4 生徒の振り返り】

生徒A	<p>今までたくさん習ってきた中で、特に印象に残った授業は「透明人間」です。この作品は「さんちき」の後にしたので、初読の感想で情景描写について書いていました。もちろん情景描写は使われていましたが、他の学びについても考えました。主人公の気持ちと姿がリンクしていて、<u>比喩表現が使われていました</u>。私は、日常生活で見ているアニメや映画とつなげて考えました。「ハウルの動く城」では情景描写も比喩表現も使われていたので、この授業の後に見ると、よりおもしろく感じました。また「Lemon」という歌では、歌詞の中に出てくる何気ない「レモン」が比喩表現として使われていて、深く読み取ることで、<u>歌詞の本当の意味について理解することができました</u>。<u>物語で学んだことが日常生活で生かされるのが小学校の頃にはなかったので、すごく印象に残りました</u>。(中略)中学校に入ってから、私の物語に対する「学び」や「捉え方」は大きく変化しました。物語に対する見方を学ぶだけで、その話の捉え方や作者が本当に伝えたかったことが分かり、<u>すごく読み取ることが楽しくなりました</u>。また、<u>日常でも何気なくみる映画やアニメ、小説、音楽の歌詞なども様々な見方で見ること</u>で、<u>捉え方や人物の気持ちなどがすごく分かって、今まで以上におもしろく見ることができました</u>。これからも色々な見方を身につけていきたいです。(下線は筆者による)</p>
生徒B	<p>2年生になると、米津玄師の「Lemon」で歌も物語性があるというのに気づき、母が好きなスピッツの歌詞カードを読むようになりました。本当に一つの物語を読んでいるみたいで、情景描写も比喩もいっぱいあって、それに気づけてとっても楽しいです。<u>小さい頃、意味も何も分からずに口ずさんでいたスピッツの歌が、中二になってこういう意味なんだ！と自分で理解できたのも嬉しいです</u>。これはもう完全に国語力がついたなと思いました。これから先、もっとたくさん物語を読んで、作者がしかけている情景描写やたくさんの表現に気づけたらいいなと思います。国語を学んで人物の気持ちを考えたり、色々なことに気づけたりしたので、それを日常に生かして、人の気持ちが考えられる優しい人になりたいです。国語でこれだけ文章が書けるようになったのも、私の学びです。私は文章を書くことが好きだし、国語を通して表現力がついたので、毎日日記帳をつけています。(中略)国語力を積み重ねていって、また知らない自分に出会いたいです。(下線は筆者による)</p>